

# ハイデッガーとは誰か

大橋良介

「誰ですか」（阿誰）という問いは、日常の生活場面で生じる日常的で *harmlos* な問いでもあり得るが、相手の本質を単刀直入に尋ねる問いでもあり得る。問いのなかで、問う者の本質が逆に問い返されたり、照らし出されたりすることもある。例えば、ハイデッガーが「ニーチェのツァラトストラとは誰か」という表題のもとで考察をおこなったとき (*in: Vorträge und Aufsätze*)、問題となっていたのはツァラトストラについての客観的データではなくて、ツァラトストラが「形而上学の内部で形而上学の完成の段階で現れる姿」だった。そしてその問題は、ハイデッガー自身の立处究明とむすびついていて、ニーチェ講義「認識としての力への意志」 (*in: Nietzsche I*) では、「ニーチェとは誰か」という問いが講義の軸となるが、それも、同様の意味次元を含んでいた。

「誰」の問いがこのような方向を含むことを念頭において、「ハイデッガーとは誰か」という問いを立ててみよう。これはすでにガダマーが、ハイデッガーの没後10年記念の講演で立てた問いである。ガダマーはそこで、「ケーレ以前のハイデッガーは誰であり、ケーレ以後のハイデッガーは誰であるか」を問うた。彼が問題にしたのは、ハイデッガーの思索展開史における、ハイデッガーの位置づけである。本発表は、一部はガダマーのこの問いを引き継ぐ仕方、そして一部は著者自身がハイデッガー没後30年記念にメスキルヒで行った講演「ハイデッガーとは誰か」を土台にして、考察を試みるものである。ここでは、「ケーレの前」ないし「ケーレの後」ではなくて、「ケーレの内」における「ハイデッガーとは誰か」が問題となる。

「ケーレの内」でケーレを書き記したハイデッガーの覚え書き『哲学の寄与論稿』(*Beiträge zur Philosophie*) に、こんな語が出てくる。「〈私〉が思索するところのものを、誰も理解しない」 („Niemand versteht, was ‚ich‘ hier denke“) 。一般に、思想家が周囲世界の無理解や誤解への嘆くことは稀ではないが、この語はそういう嘆きとは少しちがっている。なぜならハイデッガーは、ここで〈私〉を、わざわざ括弧でくくっているからである。彼は別の個所でも自分の試みを、「〈私の〉試み」と表現し、やはり〈私〉を括弧に入れている。だからハイデッガーは〈私〉という語に、ふつうとは異なった意味を含めていることが窺える。誰も〈私〉の思索を理解しないという語につづいて、こう記されている。「すなわち、有の真理から、（そしてこのことは真理の本質現成から、ということであるが）、現-有を発源させることである」。〈私〉とは、個人としてのマルティン・ハイデッガーを通しての、「現-有」 (*Da-sein*) だということが、ここで見えてくる。そうであれば、「現-有とは誰か」という問いが浮上する。周知のように、「現-有とは誰か」という問いを、ハイデッガー自身が『有と時』の中で立てた (*Sein und Zeit*, 64) 。『有と時』の試み全体の成否が、この問いにかかっていた。なぜならこの作品は、「現-有」の実存論的体制を「時

間性」として明らかにし、この根源的時間を「有」の問いの展開地平とすることを、企てるものだったからである。

しかしこれも周知のように、『有と時』の試みは完遂され得なかった。それは「現有とは誰か」の問いの挫折でもあった。まさにその挫折が「ケーレ」という問題に、そして『哲学への寄与論稿』という覚え書きに、つながっていく。そして「現有」は、「現-有」と記し直された上で、ふたたび鍵語となる。この小さなハイフンにどのような意味が籠められているかも、考えなければならないが、「現-有とは誰か」の問いが〈私〉の思索に含まれているということは、すでに明らかであろう。この問いは、なぜ『有と時』で予定されていた第一部第三編節「時と有」が書かれなかったかという問題にも、かかわるものと予想される。

ここで、インテルメッツォとして、「誰」の問いそのものの構造に目を向けてみる。ハイデggerは「ニーチェのツァラトストラとは誰か」と問うたとき、そこでは「誰であるか」という問いの形式に含まれる「ある」(*ist*)が、強調されていた。しかし漢字で記す「誰」の問いには、コプラの「ある」は含まれない。ハイデggerは「言葉は有の家である」と語った折りに、「われわれヨーロッパ人はおそらく、東アジアの人々とまったく別の家に住んでいる」とも述べたが、そのことは、「誰」の問いにも本質的にかかわるのだろうか。なぜなら「誰であるか」という問いは、「ある」という語に伴う「時間性」の前理解を含んでおり、問いを「時間性」の地平において仕上げるという方向を、すでに予告しているからである。他方で単刀直入に立てられた「誰」の問いは、時間性を「消した」ところで成り立つ「自己」を、問題とする方向を含んでいる。

ともかくも、「ハイデggerとは誰か」の問いは、ハイデggerと共に、しかしハイデggerとは別様に考える (*mit Heidegger anders als Heidegger denken*) ことを、要求するであろう。